
孤独少年と家出少女

紅の雲雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独少年と家出少女

【Nコード】

N8784M

【作者名】

紅の雲雀

【あらすじ】

俺はずっと独りだった。親が旅行が好きで家ではいつも独りだった。学校でも誰ともかかわらずに過ごしてきた。そんな俺の前に1人の女の子が倒れてた。その女の子は俺の家で暮らすことになってしまった。そんな俺とその女の子の物語。

始まり（前書き）

のんびりと書きたいのでいつ投稿できるか分かりません。

始まり

俺、霧崎望きりさきのぞむはいつも1人だ。俺の家は家族が旅行好きでいつもどこかへ旅行に行ってて家にいない。それでもお金はちゃんと仕送りされていてお金の心配はない。学校でも1人でいてクラスから浮いている。休み時間はいつも本を読んでいる。最初のうちは誰かが遊ぼう』

って言ってたけど俺は

『ごめん』

って返していた。それをいつも繰り返してたら誰も話しかけてこなくなつた。あ、例外がいた。それは……。

『このクラスで1人だけ孤立するのはダメです。君ももっと人とかわりなさい』

……と、俺に話しかけてきたのはクラス委員長の瀬野鏡花せのきょうか。いつも俺のところには話しかけてくるおせっかいさんだ。結局クラス浮いてるのは変わりないけど。鏡花はけっこう美人で男子の人氣が高い。それも浮いてる要因だろう。そうしてすべての授業がおわつた。俺は鞆に教科書をつめているといつものように鏡花が来た。

「望くん一緒に帰ろうよ」

「……………」

「無視しないで」

「……………なんでいつも俺に構ってくるんだ？」

「1人でいるから」

「俺は1人でいいの、分かった？」

「で、でも1人は寂しいよ」

「寂しくねえ」

それにしてもしつこいな。1人は寂しくない、だって俺はずっとそうだったから。

「分かったな。分かったなら友達と帰れ」

「望くんだって友達なんだから一緒に帰るのは普通だよ」

「だから！ 俺は1人でいいの！」

俺はちよつと怒りながら言ったが……。鏡花はついてきた。そして一緒に帰った。それでわかれ道で。

「じゃあ私こつちだから、バイバイ」

「……じゃあな」

やっと鏡花と別れ家に帰ろうとした。

そして家にの前に……。女の子が倒れていた。転んだだけだと思いすこしめていたけど起きる気配がない。

……死んでる？ いやまだ息してるし。どうしよう。

そう思いながら俺はどうしようか迷っていた。迷いに迷ったあげく俺は俺らしくない行動をとった。女の子を家に入れ俺のベットに寝かした。

「それにしても何で倒れていたんだ？」

そう疑問がうかんだが女の子が寝たままだから聞き出せないし。

それよりお腹減ったな、夕ご飯でも作るか……

ふー食べた食べた。……眠いな。でもベットにはあの子が寝てるし、ソファで寝るか。

う、なんだかグラグラする。なんだ地震か？ いや俺が揺れてるのか？ でも俺は1人だし……。そういえばあの女の子。

「ねえ起きて、起きてっば
やっぱり。」

「起きてお腹減った」

もしかして倒れてたのっってお腹が減ったから？

「起きなきゃ叩くよ」

どうせ叩く元気もないくせに。

「起きて〜泣くよ」

泣かれるのは困るな……。

そう思って薄目で目覚ましを見た。

朝の3時かよ……泣かれたらかなり近所迷惑じゃないか。

「泣いちゃうよ」

「やめる！」

「お、やっと起きた。ねえご飯作って。お腹減ったの」

「それよりお前は誰だ？」

「私が誰でもいいでしょ。それよりご飯！」

「ああ分かったから食べ終わったらお前のことを教えてほしい」

「私のこと？ いいよ」

ってことでご飯を作ったら喜んで食べてくれた。

「美味しかったよ」

「どーも、それじゃあお前のことを教えてくれ」

「私？ 私は葵^{あおい}、高校1年生よ」

俺と同じか。

「じゃあ何でお前は倒れてたんだ」

「それはお腹が減ったから……」

「お腹が減ったら家に帰ればいいだろ」

「家には帰りたくないの！」

「つまり家出だと……」

「……うん」

「お前はこれからどうするつもりなんだ」

「どうしたいのかわからない……あの家だけには帰りたくないし……」

……

「じゃあ警察に連絡しようか」

「やめて！ 警察は呼ばないで」

「俺にどうしろと」

「いや、だから、その、ここにいていいかな？」

「ダメだ！ 俺は1人がいいんだ」

「えーなんでいいじゃん」

「俺はまだお前のこと全然分かんないし」

「じゃあ知ればいいじゃん」

「あのな普通に考えていきなりここに居候させてくれって言われても無理だろう」

「本当にお願ひ。私行くところがないの。ひとりぼっちなの……」
俺も小さい頃そう思ったことがあった。親は昔から俺が小さい頃から旅行ばかり行って俺に構ってくれなかつた、小さい頃はちょっと広い家に1人だけでいてかなり寂しかった。胸が張り裂けそうなくらい悲しくなって泣いた日がつづいたと思う。

『ねえ、僕を1人にしないで』

葵と昔の自分を重ねてしまったらなんだかまた悲しくなってきた……。

「ねえ、お願いここにいさせて」

「しょうがなくなだからな……」

そう言つと葵はにっこりと笑い俺に抱きついてきた。

「ありがとう！」

葵は笑つてその笑顔がものすごくかわいかった。

始まり（後書き）

こんな小説でよかったらこれからもがんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8784m/>

孤独少年と家出少女

2010年10月9日03時33分発行